

押川春浪を読んだ木村毅

——アギナルドと「海洋文学」についての試論——

金子 聖 奈

はじめに

東京都千代田区にある日比谷公園を訪れると、フィリピンの作家ホセ・リサールの像と、彼を「ナショナル・ヒーロー」として顕彰する石碑（一九六一年六月一九日建立）を発見できる。この石碑の建立にあたって中心的な役割を果たしたのが、文芸評論家・作家として幅広く活躍した木村毅（一八九四―一九七九）であった。

膨大な数の著作を残した木村毅の仕事は、その全容が解明されたとは言い難いものの、およそ円本ブームの火付け役という功績や、大衆小説の理論化によって松本清張に多大な影響を与えた『小説研究十六講』（『思想・文芸講話叢書』八、一九二五年一月、新潮社）などが知られている。だが、彼を単なる大衆文学・文化の担い手としてのみ捉えることはできない。戦前には日本フェビアン協会や日本労働党への参加をとおして社会運動へ挺身したり、戦後には当時

の東京都知事や在日フィリピン大使と協同でリサールの石碑建立に尽力したりと、政治的・社会的な影響力を多分に備えていたのである。

かような木村の社会参加への意識は、たとえば晩年の松本清張との対談⁽¹⁾にも認めることができる。木村は、「日本の政治小説」が「バカにされ」てきたと述べたうえで「文学者というものは世間を知らん」と、社会情勢に無頓着な文学者を批判的に評した。これを受けて対談相手の松本清張は「近ごろも若人が『内向の世代』とか言って袋小路に入りこまざるを得ない。これからの作家は広範な社会的知識、政治知識、世界情勢の知識、こういう総合的な知識を、常識程度ではなく、かなり専門的に持つてもらいたいと思いますよ」と語っている。

なるほど、木村毅がひろく社会的な領域と交渉しながら仕事をしていたことは、廉価な出版物を大衆まで届けた円本や、大衆文学に関する著作の数々にも繋がる問題であり、文学を社会から超越した

崇高な領域として考えないという矜持が木村にあったといっても、さほど誤りではない。つまり、木村毅の仕事を検討するうえでは、文筆活動とあわせて社会参加の面を見ないわけにはいけないのである。

本稿で検討したいのは、木村毅にとってのフィリピンという問題である。というのも、木村は死去の三年前、一九七六年に行われた尾崎秀樹との対談にて、フィリピンというテーマは「僕の一生を支配した」³とまで述べているのだ。これに関して、木村毅が所蔵していたフィリピン関係の書物・資料の目録は、すでに河野昭昌、松本康正の解題とともに公開されている（「木村毅蒐集ホセ・リサール文庫」、『早稲田大学史記要』一九八五年一月、早稲田大学歴史館）。

河野・松本は、「フィリピン民族運動の指導者「国祖」ホセ・リサール（一八六一―一九六）をめぐるフィリピン独立戦争が、（中略）独壇場とも言える得意な題材の一つとなった」と、木村毅とフィリピンという題材との関わりを「フィリピン独立戦争」とりわけホセ・リサールという人物に焦点を当てて概観している。こうして、木村が資料蒐集にとどまらず翻訳、エッセイ、創作など、多くの著作で扱った「フィリピン独立戦争」という題材は一定の注目を得た。

しかし、木村がどのようにその関心を醸成し、いかなる視点から資料を集め、自らの言葉で語りなおしたのかという具体的な検証は未着手のまま。もちろん木村のフィリピン関連言説に対する評価も定まっていない。そこで本稿では、木村がフィリピンについて語

りはじめた時点、すなわち一九三五年の言説からアジア太平洋戦争の一九四〇年代前半の、新聞や随筆集などにおける木村のフィリピン関連言説を整理することから始めてみたい。木村の「独壇場」となるフィリピン独立戦争というテーマの始まりにおいて、いかなる言説空間があったのか、木村が関わった具体的なコミュニティや交流にも目を配りながら明らかにする。結論を先取りして言えば、この作業は、木村の言説が歴史の負の側面へ与してしまったことを批判的に照らし出す試みとなるだろう。

1 リサールか、アギナルドか？

管見の限り、木村毅が初めてフィリピン独立運動について言及したのは、一九三五年六月一〇日の『東京日日新聞』夕刊に寄せた「日曜の話題 アギナルド將軍」という小さな記事である。ここで木村は、「十歳の私が初めて見た映画は実に米西戦争の実写ものであった。だから米西間の紛擾の種子となったフィリッピンに興味を抱かないでをられぬ筈がなかった。それから冒険小説を読み初めて押川春浪の作には拝舞雀躍したものだ」と述懐し、「米西戦争の実写もの」の映画と「押川春浪の作」によって「フィリッピンに興味」を抱いた少年時の記憶を述べる。

加えて、約一年後に発表された「アギナルド將軍の近況」（『青灯随筆』普及版、一九三六年五月、双雅房）では、「私は比律賓独立

問題に多大の興味を持つてゐるのでその方面の書籍も若干集めてゐる」と述べ、「書籍」の例としてまず山田美妙〔比律賓 独立戦争〕「あぎなるど」

(一九〇二年九月、内外出版会)とホセ・リサール著、山田美妙訳『血の涙』(一九〇三年一〇月、内外出版会)を挙げている。だが、話題は美妙の作品からすぐに逸れ、木村の友人である「万里野君」(井澤実という実在した外交官)が赴任先のフィリピンで「アギナルド將軍」に面会したというエピソードに移る。「万里野君」によれば「アギナルド將軍」は、「比律賓の義軍が、無援の独立戦争を起してゐる時、日本の西郷隆盛が、十年戦争で死なずに比島へ渡つて来てゐて、わしの維幕に隠れてゐて神算鬼謀をめぐらすと云ふ小説があるさうだが、それを是非手に入れたものだ」と打ち明けたという。木村は、ここで言及された小説が「押川春浪の『新日本島』」のことで、私達が少年時代、実に扑舞雀躍して愛読したものである」と思い至り、「いつか綺麗な本が見つかったら將軍に贈呈しよう」と締めくくる。

つまるところ木村の「興味」は、フィリピン独立戦争や政治闘争そのものよりも、むしろ明治期のテキストとおして知り得た「アギナルド」なる人物に向けられている。頻繁に言及される「アギナルド」とは一体いかなる人物なのだろうか。

エミリオ・アギナルド (Emilio Aguinaldo, 一八六九―一九六四) は、一般に、スペインの植民地であったフィリピンの独立を達成しようとした革命家として知られる。一八九六年、フィリピン独立を

目指した結社カティブナンを率いて武力蜂起を指揮し、一八九八年にはスペイン軍に勝利して独立政府の初代首相となった。しかし直後に、キューバの独立をめぐつて衝突したアメリカとスペインが、フィリピンの領有権をも争うことになり(いわゆる米西戦争)、結果としてアギナルドが率いるカティブナンは、さらに対米独立戦争(いわゆる米比戦争)を戦うのだが、アメリカに敗北する。アメリカが新たにフィリピンを領有・植民地化し、一九〇一年、アギナルドは米軍に囚われた。池端雪浦「明治期日本人のフィリピンへのまなざし」(池端雪浦、リディア・N・ユー・ホセ編『近現代日本・フィリピン関係史』二〇〇四年四月、岩波書店)によれば、アギナルドが率いたフィリピン革命戦争は同時代(明治三〇年前後)の日本の新聞、雑誌で頻繁に取り上げられていた。春浪や美妙といった文学者が作品の材としたのも、如上の時流に影響を受けてのことである。ただし、同時代に関心を集めたのはアギナルドだけではない。美妙の『あぎなるど』前編を一読すれば、アギナルドではなくもう一人のフィリピン人、ホセ・リサールについての記述の多さに気がつくだろう。また、木村が書名をあげた『血の涙』は、ホセ・リサールの名著『ノリ・メ・タンヘレ』(Noli Me Tángere)を美妙が日本語に訳したものである。

このホセ・リサール (Jose Rizal, 一八六一―一八九六) は、フィリピンの作家・医者である。一八八七年に長編小説『ノリ・メ・タンヘレ』、一八九一年にその続編である『エル・フィリプステリス

モ』(El Filibusterismo)を留学先のドイツの出版社からスペイン語で発表し、フィリピンの民衆を抑圧するスペイン植民地政府の圧政を描いた。これらは、ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』(一九八三年)や『比較の亡霊』(一九九八年)、『三つの旗のもとに』(二〇〇五年)に取り上げられたことでもよく知られている。だがその人生は短く、スペインの植民地支配に抗する武力蜂起が起これと、直接それに関与していないのにも関わらずスペイン官憲によって処刑された。

アギナルドとリサルは、フィリピンの反植民地運動をめぐって欠かせない人物である。美妙の『あぎなるど』が用いた比喩を借りて言えば、アギナルドが剣の力によって独立を目指した一方、リサルは筆の力で植民地主義へ抵抗したのだ。ただし、リサルがたった三五年で命を奪われたのに対して、アギナルドは独立戦争後約四〇年間のアメリカ植民地時代(一九四二～四五年)、アジア太平洋戦争にともなう日本占領時代(一九四二～四五年)を生き抜き、一九六四年に、九四年の生涯を終えた。

さしあたって重要なのは、明治期テキストにおけるフィリピン独立戦争の言説化が、リサルとアギナルドという主に二人の歴史的人物の象徴化をとおして行われているということだ。土屋忍は、美妙の『あぎなるど』と春浪の『新日本島』に「風景描写はほとんどなく」、それぞれが「突出した人物による「活劇」」になっていると指摘したが、まさに、フィリピン革命の英雄的人物を象徴的に描く

テキストを通じて、木村の「比律賓独立問題」への関心は生成されたのだ。一九三五年の時点において、木村が存命の「アギナルド將軍」の動向に強い関心を示したのも、明治文学が形象した人物像のインパクトゆえと、まずもって言えるだろう。

木村は、一九三五年六月の新聞記事を端緒として、以後さまざまな媒体でフィリピンの独立革命を担った英雄たちに言及するようになる。次節以降で論ずるように、彼はそこにおいてホセ・リサルについてほとんど語らない一方、押川春浪の作品に象徴化されるエミリオ・アギナルドを前面化する。先行研究の河野・松本は、ホセ・リサルをめぐる言説が木村の「独壇場とも言える得意な題材の一つ」と指摘していたが、これは戦後について言えることであり、一九三〇年代から敗戦まで、すなわち「大東亜」へ拡大していく帝国の時代においては、リサルではなくむしろアギナルドへ強い関心を寄せるのである。

2 冒険小説と、かつて少年だった者たち

木村が「この作によってアギナルド將軍およびフィリッピンの歴史に異常な興味をもつに至った」⁽⁵⁾と語る押川春浪の『英雄新日本島』(一九〇六年六月、文武堂)は、『海島奇譚 海底軍艦』(一九〇〇年十一月、文武堂)を第一作とした『海底軍艦』シリーズの第五作目にあたる。同シリーズは「武俠六部作」とも呼ばれ、ほかに『英雄武俠の日本』

(一九〇二年十二月、博文館)、『海国冒険奇譚新造軍艦』(一九〇四年一月、博文館)、『戦時英雄小説武俠艦隊』(一九〇四年九月、文武堂)、『英雄小説東洋武俠団』(一九〇七年十二月、文武堂)を擁する。物語のおおすじは、日本の軍艦「うねび」がロシア軍艦に襲撃されることから始まり、乗っていた櫻木大佐ら「日本男児」が流れ着いた無人島で「東洋武俠団」を結成し、ロシアへの復讐を企てるというものだ。第二作目『英雄小説武俠の日本』で、櫻木大佐らの「武俠団体」に合流するのが「アギナルド将軍」で、つづく五作目の『英雄小説新日本島』でも「安藝鳴戸」(アギナルド)は「南洋の奇傑」と称揚されている。

数々の「豪傑」が登場する春浪の小説では、「近世の最大英雄」として西郷南洲も登場する。むしろ史実と異なるが、春浪の作品世界での西郷は、「西南戦争の後未だ死せず」フィリピンでアギナルドの革命戦争を扶けていたというのだ。『英雄小説武俠の日本』でアギナルドは、西郷が「密かに比律賓に身を隠し、幾年月の間パイアン山の麓に風月を友として、静かに天下の大勢を洞観して笑つて居られたのを、我等は其高風を慕ひ、遂に独立軍の大軍師として仰ぐ事になつたのです」。「南洲翁は(中略)我等の義拳を扶けて下さつたのです」と語る。また『英雄小説新日本島』でも、「老英雄が、数年前以前我身とともにこの無人島に來りこの洞窟の奥にて、比律賓独立軍の軍議を凝らした」とあり、アギナルドと西郷の連帯は、連作に底流するプロットの一つになっている。この「豪傑」たちに魅せられたのが、在りし日の木村毅であった。

しかし、彼が初めて公のメディアでそれを語ったのが一九三五年であるということ——このとき木村はすでに四一歳である——は、いささか唐突に思われる。春浪を読んだ記憶語りをそれから幾度もくり返すことから、それが一度限りの思いつきではなく何かしらの外的要因と関わっていると見るべきであろう。このタイミングで春浪⇨アギナルドについて語ることにいかなる意味があるのか、しばし考えてみたい。

直接的に如上の記憶語りを触発したのは、一九三五年六月初旬のフィリピンにおける政治情勢の変動とみて間違いない。対米独立戦争の敗北を経てアメリカの植民地となったフィリピンは、一九三四年三月、アメリカ植民地政府との間で将来的な独立の約束を取り決め、独立準備政府(コモンウェルス政府)の発足を宣言した。これに続いて、一九三五年六月にコモンウェルス政府の大統領選挙の開催が決まり、エミリオ・アギナルドほか三名が立候補した。結局アギナルドは落選し、当選したのはマニエル・ケソンだったが、この選挙に関する報道がフィリピン独立革命の当時や春浪を読んだ記憶を木村に思い起こさせたのだ。⁶⁾

しかしそれは、私的な領域にある幼少期の「思い出」を、なぜ新聞や自著といった公的な場で何度も語り直したのか、という問いに答えるものではない。私的な「思い出」が、公然の場で何度も書き記されることの意味を考えてこそ、彼の仕事におけるフィリピン独立戦争の位置づけの追究につながると思うのだ。その点で、木村が

押川春浪の冒険小説を「私達」が少年時代、実に扑舞雀躍して愛読（傍点は引用者による。以下同）と、複数化して述べたことは注目に値する。木村は、単に自らを春浪の愛読者として位置づけるのではなく、個人を超えたところにもその愛読者がいるかのように語っているのだ。

これに関して、押川春浪と出版メディアの関係に焦点を当てた武田悠希の論や、『海底軍艦』シリーズの創出する「読者共同体」を検討した鈴木康夫の論は示唆に富む。まず武田は、日清・日露戦争の気運のなかで多くの読者をもった少年向けの雑誌『少年世界』（博文館）の分析から、押川春浪が『海底軍艦』シリーズの発表期（一九〇〇～一九〇六年）に、創刊当時から冒険小説を寄稿していた江見水蔭を凌ぐ人気を博すようになったと指摘した。また鈴木は、『海底軍艦』シリーズの登場人物たちが「同志」として次々に連結していく物語の機構について、「彼らはお互いが豪傑であり、志を共有していることを一瞬のうちに理解しあ」い、「武俠」なる属性のみに還元され連鎖して「豪傑の共同体」を形成しているとみる。そして、「読者諸君！」と呼びかける語りが、読者をも「豪傑の共同体」に参加させると指摘した。当の木村も『少年世界』の「愛読者」で、一九〇六（明治三九）年に投書を始め、「押川春浪の小説なんていうのは、もう待ちかねて読ん」だ（と振り返る。つまり、彼もまた『少年世界』の読者共同体、あるいは『海底軍艦』シリーズの語りが呼びかける「豪傑たちの共同体」のなかにいた一人の少年だったのだ。

木村のいう「扑舞雀躍して愛読」した「私達」とは、春浪の冒険譚に耽溺したかつての少年たちとの、ノスタルジックな繋がりを示す表現であるともずもって言える。

だが、木村の念頭にあったのは、かかる形而上的な共同体だけではない。フィリピン、とりわけアギナルドというテーマからは、木村のネットワークとして重要な「明治文化研究会」の活動や、木村が「生涯の交友」という柳田泉など、より具体的な人脈も浮かび上がってくるのである。次節では、木村の直接的な人間関係に注目しながら、春浪「アギナルドの読書体験の語り」の持つ意味を考えていく。

3 明治文化研究会の木村毅、柳田泉

吉野作造が一九二四年一月に設立した明治文化研究会に、木村は一九二五年に参加し、すでに知己であった柳田泉を誘った。近年の研究は、この研究会を軒並み高く評価している。たとえば関井光男は、日本近代文学研究の勃興の起源を「明治文化研究会の知的背景」に求め、「木村毅と柳田泉の近代文学研究は、（中略）日本近代文学研究のテキスト／コンテキスト、文学／背景という二元的思考を無化する一つの視点を提示している」と、文学テキストを社会的ありようと結んでいく研究姿勢の先駆性を評価した。さらに中山弘明は、木村毅の〈移民〉へのまなざしを「ポストコロニアルの言説

を写し出す鏡として、今日の文学研究に問いを投げかけ」るものと価値づけ、それは明治文化研究会に共有されていたとする。⁽¹²⁾総じて、社会と言葉を相互還流させる視点のはじまりとして木村と柳田、あるいは明治文化研究会は評価されてきた。

本稿で注目するのもまた、言葉と社会的コンテクストとを不可分に捉え、「現在と過去の「歴史」を問」い「自明の常識をカッコに入れて認識論的布置を変え」る事業のひとつとしての、宮崎滔天『三十三年之夢』の復刻である。

「明治文化に關係する資料は次第に湮滅」することを危惧した明治文化研究会は、福永書店を発売元とし、坪内逍遙の『^{内地}維新未来の夢』（一九二六年六月）、宮崎滔天の『三十三年之夢』（一九二六年七月）、小野秀雄の『もしほ草／横浜新報 江湖新聞』（一九二六年一〇月）を復刻した。『三十三年の夢』は、一九〇二年に国光書房から出版された初版を底本とし、吉野作造が新たに校註を加える形で復刻された。吉野作造は、『三十三年之夢』復刻の経緯を「初版の刊行が明治三十五年、当時非常の評判で版を重ねること十たびにも及んだが、其後久しく絶版の儘で昨今漸く人に忘れられんとしたのを、今度私共の仲間再刊することにした」と述べている。⁽¹⁴⁾

『三十三年之夢』は、孫逸仙（孫文）の革命の支援に奔走した宮崎滔天の自叙伝である。そのなかの「素人外交家」、「南洋の風雲と吾党の活動」の章には、フィリピンの政治活動家マリアノ・ポンセの来日や、その出会いから起こったアギナルド軍の支援計画が書か

れている。たとえば以下の箇所である。

時に報あり、いう、アギナルド部下を率いて戦場に立てり、と。すでにして南万里は両湖の視察を終りて帰り来たれり。いう／畢永年君の先容によりて、哥老会員と交結するを得たり。みな手を額にして義軍の起こるを待てり。しかして、会中の人用ゆべきもの甚だ多し。もし孫君にして戦を掲げて起たんか、天下警戒知るべきのみ／ついに孫君の提議によりて、ひそかに会中の人をひきいてア氏の軍に投じてその成功を速かならしめ、余勢を転じて支那内地に進入し、以て革命軍を中原に起こさんことを協定せり。（傍線は引用者による。／は改行。以下同）

ここには、中国革命の支援に連なるかたちでフィリピンの脱植民地運動を支援しようとするさまが見られる。言うなれば、アジアにおける独立や革命への志向という「漸く人に忘れられんとした」明治文化の一面を記憶にとどめようとする営為が、『三十三年之夢』の復刻なのである。これによって、フィリピンの独立戦争に関する知見もまた、吉野作造のいう「私共の仲間」、すなわち明治文化研究会の面々で共有されたと考えて不思議はない。実際、アギナルドの独立軍に武器を供与しようと尽力する宮崎滔天らは、後年木村が発表した小説『布引丸』（一九四四年一月、春陽堂書店）に主要人

物として登場する。明治文化研究会の経験が木村のフィリピン独立戦争に関する見識を涵養したからこそ、一九三五年六月の大統領選挙という外的な刺激にも、即座に反応して記事を寄稿しえたのである。

明治文化研究会のなかで、わけでも柳田泉の存在は注目に値する。一九一八年に始まった柳田と木村の交友関係は、五〇年余にわたって終生続き、互いに学び合う関係であった。さらに、一九六一年二月四～八日にフィリピン・マニラで開催されたリサール国際会議 (International Congress on Rizal) に、木村と柳田がともに公式の招待を受けている。¹⁵⁾ 木村毅と柳田泉は、一九六〇年代に及ぶまでフィリピンというテーマを共有した文学者でもある。

重要なのは、柳田泉が一九三四年五月号の『新潮』にて「少年時代中学時代に最も愛読したものは何かといへば、押川春浪の諸作である。私なども全く文字通り心酔したもので、兄に学用品を買ふとウソについてはこつそり春浪物を輸入したものだ」と述べ、『海底軍艦』から続く六部作を「何度くり返して読んだか知れない」と書いていることだ。木村が春浪を読んだ少年時代を述懐するのはこの約一年後のことで、すでに二人は昵懇の仲である。したがって、木村による春浪を読んだ少年時代の記憶語りは、まるで柳田泉の言葉を反復するかのようになされているのであり、春浪作品に「抹舞雀躍」した「私達」とは『少年世界』に親しんだ少年たちの読者共同体だけでなく、柳田泉との親密な関係をパフォーマティヴに暗示す

るものでもあるのだ。

ただし、柳田の研究は春浪Ⅱアギナルドという主題ではなく、むしろホセ・リサールを重要人物として浮上させていく。同時期の大仕事である『政治小説研究』全三巻（一九三五年五月～七月、春秋社）中巻の「末広鉄腸研究」の章で柳田は、末広鉄腸の作品のうちフィリピンに題材をとった『政治小説南洋の大波瀾』（一八九一年）、『あらしのなごり』（一八九一年）、『政治小説大海原』（一八九四年）に言及し、今やフィリピン―日本関係を語るに欠かせないある事実を明らかにした。

末広鉄腸の『政治小説南洋の大波瀾』は、ホセ・リサールをモデルとした多加山という人物が、スペインからの独立のために奔走する物語である。これについて柳田は、「鉄腸がヒリッピン独立譚を書いたのは、勿論寓意のあつてのことではあるが、舞台をヒリッピンに選んだのは偶然ではない」と述べる。そして、『政治小説南洋の大波瀾』序文の「余の前年西洋に遊ぶや魔尼羅の一紳士を相識る魔尼羅は南洋中にあつて西班牙の植民地たる緋笠濱群島の一なる呂宋の首府なり」という箇所について、以下のように記した。

このマニラ人とは何人であるか、吾等は幸にして鉄腸の欧米見聞記ともいふべき『鴻雪録』に於いてこの人を知ることが出来る――（中略）ヒリッピン独立運動の先駆たるリサルにリサルが二人とはない、即ちこの「マニラ」紳士こそ、アギナルドの

先輩で有名な『ノリ・メ・タンヘレ』（訳名血の涙、直訳「我に触る、勿れ」）の著者たるリサル博士に外ならない。鉄腸洋行の同行者がこの革命児であつたとは、何といふ奇遇であらう。

柳田は、鉄腸の研究をとおして、ホセ・リサルと末広鉄腸が実際に邂逅していたという事実を明らかにした。『政治小説研究』の刊行は一九三五年一〇月であるから、木村が春浪の読書体験を懐古的に語り始めた頃と重なっている。すなわち、日本近代文学研究の先駆者とされる木村毅と柳田泉は、春浪の冒険小説、鉄腸の政治小説、あるいは美妙の翻訳等の受容・研究をとおして、ほぼ同時期にフィリピンと日本の文化的、政治・社会的関係に切り込んだのである。

以上のことから、木村毅が一九三五年という時空間において、私的な思い出を公的なメディアで語り直し、春浪の読者として自己表明したことの意味は明らかだろう。木村の記憶語りは、明治文化研究会を通じてアジアの独立に関する歴史的知見の共有や、鉄腸＝リサルに関する研究を進める柳田泉との親交というネットワークのなか、同じ教養基盤を持つ者として自らを布置する試みにほかならなかったのである。

4 「くろがね会」と共同性

ここで、新たに次のような疑問が生じてくる。すなわち、柳田の政治小説に関わる研究成果の発表や、明治文化研究会の、フィリピン独立革命の記憶を再生する文献の復刻は、紛れもなく人文知を社会に共有する営みであり、明治文化研究会の追求した「現在と過去の「歴史」を問」うアプローチとして何ら遜色がない。他方で木村の読書体験の回顧は、そうした社会全体へのアプローチとは位相が異なりはしないか、というものである。結局、春浪を読んだ木村の読書経験の懐古的語りとは、単なる私的な昔話の域を出ないのではないかと。

結論から言えば、押川春浪を愛読した記憶の語りは、一九三〇年代後半から一九四〇年代にかけて盛んになる「海洋文学」の提唱と湊合する。この意味で、木村の読書体験に関する発言は私的な思い出の吐露にとどまらず、結果的に、「歴史」の「認識論的布置」の変革と結託することになったのである。

木村毅は、海軍の外郭文化団体である「くろがね会」の理事長をつとめた。⁽¹⁶⁾くろがね会とは、「文芸作家の人々」を中心に一九四一年八月四日に結成された「海事文化団体」であり、「大日本帝国の海洋立国の国是を体し」、「広汎、強力なる文化運動の実践」によって「海軍精神の昂揚、海防思想の普及をはかる」ことを目的とした。⁽¹⁷⁾

同会に関するこれまでの研究では、たとえば尾形明子は、長谷川時雨が主宰した「女流作家」の組織「輝ク会」とくろがね会の関わりに注目し、「銃後運動強化のために「耀ク部隊」を「くろがね会」婦人部として再組織することを意図した木村毅」が「岡田八千代に申し入れ」、一九四一年一二月の対米英戦勃発後に両団体の合流が実現したことを明らかにしている。⁽¹⁸⁾ また、くろがね会が一九四一年一〇月に創刊、一九四三年一二月まで刊行していた雑誌『くろがね会報』（一九四二年三月からは誌名を『くろがね』と改題）から、会の役員構成を紐解いた石川巧は、「菊池寛や大佛次郎といった大御所作家のもと、大下宇陀児、水谷隼、海野十三、木々高太郎、角田喜久雄、山手樹一郎といった探偵小説作家、SF作家、時代小説作家が名を連ねている」と指摘し、「戦前・戦中に絶大な人気を誇っていた大衆文学系の作家たちがこぞつてくろがね会に参加した背景に、当時の文学状況が色濃く反映していることは間違いない」⁽¹⁹⁾と述べた。石川は名前をあげていないが、大衆文学系の人気作家たちで構成された役員のなかに、理事長としての木村毅もいたのである。

くろがね会の活動は、「国民に遍く日本の「海洋思想」を知らしめるための啓蒙」と「前戦の兵士に読物を届けるための慰問」⁽²⁰⁾を主柱としていた。重要な課題とされたのが日本の「海洋文学」史の創出である。大西仁によれば、「海洋文学振興」の試みは一九三九年以降に活発になった一種の文化的・社会的現象であり、その本質は「対外進出による富国強兵論と同質」の「周辺地域への侵略・対外

進出を自己正当化」⁽²¹⁾するものだった。くろがね会の活動もこの文学運動の潮流に位置づけられる。

雑誌『くろがね』の頁を繰ると、木村の運営面での活躍が見えてくる。とりわけ会の事業の一つである「くろがね会海洋講座」は、「海洋思想」を広める啓蒙活動の一環として毎月開催された講演会で、第一回・第二回は柳田泉による「明治大正の海洋文学」という題目の講演であった。「柳田泉氏に講演を願った」⁽²²⁾背景に理事長・木村毅の人脈力を見ることは容易い。

一九四一年一〇月三〇日に第一回、十一月二〇日に第二回を「非常な盛会」で終えた柳田の講演会は、「くろがね会海洋講座第一輯」として柳田泉『明治・大正の海洋文学』（一九四二年三月、くろがね会）にまとめられ、刊行された。当該書でも柳田は、明治期のフィリピンを題材にした文学について、末広鉄腸の『南洋の大波瀾』を「フィリピン独立志士の運動を中心にして書いたのでありますが、頗る徹底してゐる」、押川春浪の「『東洋武俠団』物の六冊続き」を「南洋に進出しなければいかぬというイデオロギーを、集大成した」と評価している。とはいえ、柳田は矢野龍溪の『浮城物語』や石井研堂の漂流譚など、さまざまな海に関する日本文学作品に簡潔に言及し、特定の作家・作品の価値を強調しすぎることはない。また、『くろがね会報』第一巻第二号に掲載された「『海洋購座』後書」では、参加者たちが講演の印象を語り合う様子が掲載されている。そこでは、夏目漱石が序文を寄せたことで知られる『海のロマンス』

(一九一五年二月、誠文堂書店・中興館書店)の著者、米窪太刀雄の「私の最も敬愛するコンラッドの作品が、幸ひにして、柳田先生からコンファアーズされて、誠に快心に堪へません」という発言に端を発して、コンラッド文学について参加者が所感を交わしている。

しかし、ほかの作家・作品について議論を深めた様子はない。

そのようななか、木村は「日本の海洋文学」⁽²³⁾という文章でくろがね会と柳田の講演に触れながら、木村の考える「海洋文学」観を披瀝する。長くなるが、一部を引用しよう。

内外航路どの船に乗つても「私は米窪太刀雄さんの「海のロマンス」をよんで、船乗り生活にあぐがれました」といふ若い機関士や事務長に、必ず出あつたものである。私は米窪氏の著書が、予想もつかない大きな役割をしてゐるのに驚いたのだが、然らばそれはすぐれた海洋文学の一つである。(中略) 私たち

六人(吉川英治、大佛次郎、加藤武雄、白井喬二、竹田敏彦、木村毅)でなる太陽会で、先夜、読書会の名士数人を招待して、出版機構がかはるについての、懇談をした。谷萩少将や、久富日本出版会長や、帝大の辰野隆博士や、早稲田の柳田泉教授や、上泉秀信氏などがその夜の客だつたが、席上で押川春浪の話が出た。／誰も彼もが、彼の『新日本島』や『東洋武俠団』を夜の眼も寝ずに愛読し、熟読した思ひ出を共有してゐるのだ。／そしてみんなが今日、南洋もしくは大東亜共栄圏について

関心の出発点は云ひ合わせたやうに押川春浪にあるのだ。(中略) 春浪の作は、海洋冒険小説として立派な役目をはたしてゐるので即ち名作だといふことになる。

木村は、米窪の『海のロマンス』を「すぐれた海洋文学の一つ」と留保付きで敬意を表しつつ、なお押川春浪の作品について「海洋冒険小説として立派な役目をはたしてゐるので即ち名作」と称賛する。その根拠を「誰も彼もが、彼の『新日本島』や『東洋武俠団』を夜の眼も寝ずに愛読し、熟読した思ひ出を共有してゐる」からであるとし、春浪の作品を「みんな」の「大東亜共栄圏についてもつ関心の出发点」として適及的に位置づけているのである。

「みんな」あるいは「誰も彼も」とは、具体的には引用中に名の挙がった「吉川英治、大佛次郎、加藤武雄、白井喬二、竹田敏彦、木村毅」などの「懇談」の出席者を指している。引用部にある「太陽会」については、管見では実態を掴めなかったのだが、少なくとも、掲げられた文学者の六人全員がくろがね会の会員である。⁽²⁴⁾ また、引用部に登場する「柳田泉教授」も当時すでにくろがね会の会員だ。すなわち、このとき木村は、くろがね会を基盤としたコミュニティにおいて、春浪の読書体験を「大東亜共栄圏」への関心の「出发点」として布置しているのだ。

今や、「木村の読書体験の語りは社会にアプローチするものではないか」という問いの答えは明らかだろう。春浪を

読んだ木村毅の「思い出」語りは、単なる私的な回想にとどまるものではなく、「思い出」を共有する共同体を行為遂行的に創出し、「大東亜共栄圏」のイデオロギーと取り結ぶ言説となったのである。

5 海を越えた春浪

一九四三年三月、木村はついに日本軍が占領するフィリピンに降り立ち、そこに約二ヶ月間滞在する機会を得た。「新聞社の従軍記者として特にフィリッピンを志願」した木村は、その理由を「実に小学校時代によんだ押川春浪の冒険小説の感化」⁽²⁵⁾であったと述べる。このときの木村の見聞や随想は、『マニラ紀行 南の真珠』（一九四三年一〇月、全国書房）にまとめられた。

同書では、再び「吾々の少年時代は、押川春浪の小説に欣喜雀躍しない者はなく、それによつて初めて、東洋は一大共栄圏をつくらねばならぬことを鼓吹され」たと、春浪を「一大共栄圏」の関心の端緒として語る。ここでも、「吾々の少年時代」という共同性を「押川春浪の小説」で担保し、「東洋は一大共栄圏をつくらねばならぬ」というイデオロギーを改めて主張するのである。

そして彼は、ついに本物のエミリオ・アギナルドとの面会を果たしたのである。⁽²⁶⁾ 出発前に、アギナルドに春浪の『海底軍艦』シリーズを贈呈するため古本探しに奔走し、「四冊は柳田泉君が古本屋で見つけてくれ、二冊は私がさがして揃へた」。そして「忘れずに、

押川春浪の小説六冊を荷の中につめ」てフィリピンに持参した木村は、『新日本島』とシリーズ一式をアギナルド本人に「献上」したという。これに対してアギナルドは、「英語で、『自分のこの書を求めること実に四十年に近い。(中略)思へば日本軍がマニラに入つて、アメリカ兵を駆逐した時、恰もそれを預言したやうなこの小説が手に入つたのも、何等かの天意であらう』と話したと、木村は述べている。アギナルドがほんとうにそのように発言したのかどうか、もはや知る由もない(同書には、アギナルドが木村に宛てた手書きのメッセージの図像が挿入されているが、挨拶以上の意味は読み取れない)⁽²⁷⁾。いずれにせよ春浪作品は、アギナルドの発言という体裁を取りつつなお、「日本軍がマニラに入つて、アメリカ兵を駆逐」することを「預言」した小説として——シリーズの主要な「敵」は「露国」であるにも関わらず——位置づけられているのだ。

ここまで本稿は、文学を実社会と交渉しあうものとして考えていた木村毅の、フィリピンへの関心の一側面について検討してきた。少年時代に押川春浪の冒険小説を愛読した木村毅は、その記憶を、明治文化研究会や柳田泉との交友をとおして遡及的に言説化する。それは、「私達」「みんな」「吾々」といった語を伴って、他者と共有されたものとして語られた。木村は春浪を読んだ過去を、「海洋文学」振興の気運や、一九四一年に発足した「くろがね会」の活動といった同時代の社会的気運と湊合させることで、春浪の「武俠」的な世界——「圧倒的武力を背景にして権力をふるい乱暴狼藉を働

く強者を敵視して、正義感に基づき少数精鋭の力を結集して誅する集団的暴力」の世界――を一つの共有知として位置づけたのである。

アジア太平洋戦争の時代、地位も発言力もあった木村は、春浪の小説のテーマを「大東亜共栄圏」の創造へと積極的に読み替えた。その意味で木村は、春浪の作品を「大東亜」イデオロギーに連なるものとして措定する媒介者として大きな役割を果たしたと言える。かくして、私的な読書の「思い出」は公的な共有物として置き直され、戦争遂行への加担と軌を一にしまったのである。

おわりに

戦後、木村毅は自らの戦争への態度を振り返って「くろがね会」や陸軍の航空本部に徴用されてことわる勇気がなく、(中略)その特権を行使して、はばからなかった」と述べる。そして、「長年、平和論と反軍思想を口にしながら」も「自分で何等戦争防止の積極手段は少しも講ぜず」「人ごとのように考えていた」と自責している。⁽²⁹⁾本稿で論じたのは、押川春浪の海洋冒険小説をよすがとして「大東亜」イデオロギーを反覆しつつけた、木村毅の戦争協力の一側面でもある。

それでは、自らの戦争協力を顧みた木村は戦後、春浪を称賛した自らの言葉を撤回したのだろうか。試みに『日本近代文学大事典増補改定デジタル版』⁽³⁰⁾を紐解くと、「押川春浪」の項目は木村毅が

執筆しており、興味深いことに『海底軍艦』シリーズを「明治冒険小説最大傑作」と絶賛している。本項目は一九七七年刊行の『日本近代文学大事典』から修正されていないため、この記述は一九七〇年ごろ、すなわち晩年の木村の認識と見てよいが、日本の敗戦後にも木村は、なお春浪を高く評価する姿勢を変えていないのである。

けっして、一九七〇年ごろの主な批評・研究が春浪を高く評価する傾向にあったわけではない。たとえば鳥越信は、作中人物がみな「南進論の忠実な実行者」だ⁽³¹⁾とい、佐藤忠雄も「愛国主義、進出主義」でぬられた「アジアの盟主日本」のイメージを論難する。⁽³²⁾上筈一郎は、「ナショナリズム児童文学における思想の完成者」とし、⁽³³⁾押川評価の「基本軸」を作ったとされる中島河太郎は、春浪を「ご都合主義のヒロイズム」と批判、『海底軍艦』についても「子供欺し」といいいほどイージーな構成」と辛辣である。⁽³⁵⁾以上のように、春浪の作品が含むもつ「大東亜」イデオロギーに連なる要素は、一九六〇年以降には痛烈な批判の対象になっていた。木村毅が積極的に剔抉し、称賛した春浪作品の政治性は、翻って批判の根拠となったのである。

いずれにせよ、一九六〇～七〇年代には主に春浪作品のナショナリズムや、対露戦争を煽る政治的テーマによって作品自体も批判されていたのであり、それを「最大傑作」と述べる木村は、この批判的風潮から明らかに遊離している。木村の春浪評価は、一九三五年から晩年の一九七〇年代に至るまで貫かれ、かたく打ち固められて

いるのだ。⁽³⁶⁾

木村は自らの戦争加担を責めつつも、戦後の文学研究者たちの春浪に対する批判的論調に棹さすことなく、「最大傑作」と言い続けた。他の文学研究者の列に並ばないその姿勢は、「まじめな学術研究などというのは私のがらにな」く、自らの仕事を「ルンペン的な研究」だという木村の、「アカデミズムに対する反対的立場⁽³⁷⁾」と関わるかもしれない。だとすれば、「日本近代文学研究の起源⁽³⁸⁾」と言われた木村が文学研究の主流から距離をとっているという事態を照らし出すことにつながるかもしれないが、紙幅は尽きた。木村毅の著作の全容とともに、その思想も詳らかにされることを期待するばかりである。

注

- (1) 「東京都へも当時の駐日大使アデヴァ氏から申し込みがあり、東都知事から、リサールと日本の関係を調べてくれといわれて、私がその仕事をした」(木村毅「日比のかけ橋となったホセ・リサール」、「時」一九六三年一月号)という経緯。
- (2) 木村毅、松本清張「明治の小説・現代の小説——「政治小説」を軸に」(『文学界』一九七六年一月)
- (3) 木村毅、尾崎秀樹「黎明期の少年文学」(『現代詩手帖』一九七六年九月号)
- (4) 土屋忍「エミリオ・アギナルドの表象——山田美妙と押川春浪」(『南洋文学の生成 訪れることと想うこと』二〇一三年九月、新典社)
- (5) 木村毅「冒険小説」(『文学修業』一九五六年五月、洋々社)

- (6) 木村が「最初の大統領候補として、アギナルド将軍が名乗り出たとの報道は、私には聊か懐かしいものであった」(『東京日日新聞』夕刊、一九三五年六月一〇日)と述べる。

- (7) 鈴木康夫「『武俠六部作』の構造と読者共同体——『冒険世界』に参加する読者たちと媒介者としての春浪」(『奈良女子大学研究教育年報』第九号、二〇一四年二月、奈良女子大学文学部)

- (8) 武田悠希「第二章 冒険小説家としての押川春浪——少年雑誌における認知の推移」(『世紀転換期の出版文化と押川春浪——冒険小説の生成と受容』二〇一八年三月、博士論文(立命館大学))

- (9) 前掲(3)に同じ。

- (10) 木村毅「柳田泉君を哭す」(『明治文化研究』第六集、一九七二年六月、日本評論社)

- (11) 関井光雄「日本近代文学研究の起源 明治文化研究会と円本」(『日本文学』四三巻三号、一九九四年三月、日本文学協会)

- (12) 中山弘明「木村毅の〈移民〉論——「明治文化研究会」周辺——」(『学問史』としての近代文学研究——「はじまり」の位相』二〇二四年五月、ひつじ書房)。中山は、木村蒐集の二葉亭四迷に関する資料や、尾佐竹猛のエドワード・スネルに関する論考を踏まえ、カリフォルニアへ渡った会津移民のテーマが明治文学研究会にとって「重要な課題の一つであ」り、〈移民〉へのまなざしを育んだと指摘している。

- (13) 前掲(11)に同じ。

- (14) 白浪庵滔天(宮崎滔天)著、吉野作造校訂『三十二年之夢』(一九二六年七月、明治文化研究会発行、福永書店)

- (15) 木村は渡比し、会議に参加して「ホセ・リサールと日本文学」という題目による講演を行なった。しかし、柳田は体調不良のため参加を辞退した。

- (16) 加太こうじ「石井研堂・木村毅・田村栄太郎」(『思想の科学』一九八〇年五月、思想の科学社)は、戦中の木村は「くるがね会」のみならず、「文学報国会」という文学者の戦時統制組織のなかでも一つの地位を持ってい

- た」と指摘する。
- (17) 日本海事振興会日本海事新聞発行事務局編『海事団体要覧』（一九四四年一月、亜細亜書房）
- (18) 尾形明子『輝く』の時代——長谷川時雨とその周辺』（一九九三年九月、ドメス出版）
- (19) 石川巧『海軍外郭団体雑誌『くろがね』解題・復刻版』（二〇一八年一月、金沢文圃閣）
- (20) 前掲(19)に同じ。
- (21) 大西仁「戦時下の日本における海洋文学の提唱とその経緯」（『跨境 日本語文学研究』二〇二〇年十二月、東アジアと同時代日本語文学フォーラム）
- (22) 「海洋購座」後書（『くろがね会報』第一巻第二号、一九四一年十二月）
- (23) 木村毅『増産の旅』（一九四三年九月、秩父書房）に所収。初出は管見の限り不明。
- (24) 「評議員名簿」、「社員名簿」（『くろがね』第二巻第一〇号、一九四三年一〇月）、および「会員名簿（文芸部）」（『くろがね』第二巻第二二号、一九四三年十二月）
- (25) 前掲(5)に同じ。
- (26) Ara, Satoshi. “Emilio Aguinaldo under American and Japanese Rule Submission for Independence?”. *Philippine Studies: Historical & Ethnographic Viewpoints*, Vol. 63, No. 2, June 2015. によれば、アギナルドは「独立」のために日本政府に自発的に協力しながら、軍部に対して自分への恩給に関する金銭的な交渉も行っていた。木村は、このようにアギナルドが日本軍とすでに接触していたからこそ、面会を実現できた。
- (27) アギナルドによってタガログ語で書かれた手紙。翻刻すると「[Tsang alala sa bantog / na manunulat na hapon / Ginoong Ki Kimura / Emilio Aguinaldo Fany / E.Aguinaldos / 22, Mar. 1942. / Kuwait, Cavite, I. F.] となり、日本語に訳すと「日本の有名な作家、木村毅へ思い出として／エミリオ・アギナルド／一九四二年三月二二日／フィリピン・カワイテ州、カワイットにて」となる。
- (28) 前掲(4)に同じ。
- (29) 木村毅「トルストイとドゥボホル」（『ドゥボホル教徒の話』一九六五年三月、講談社）
- (30) 日本近代文学館編『日本近代文学大事典』一九八四年一〇月、講談社をもとに修正・加筆のうえ電子化され、二〇二四年二月に公開。
- (31) 鳥越信「総論西の場合・東の場合」（『大衆文学研究』、一九六二年一〇月）
- (32) 佐藤忠雄「少年の理想主義」（一九六四年五月、明治図書出版）
- (33) 上笙一郎「日本児童文学におけるナシヨナリズムの系譜」（『日本文学』一九六一年一〇月）
- (34) 前掲(7)に同じ。
- (35) 中島河太郎「富国強兵の国是のもとで」（『現代詩手帳』一九七六年九月）
- (36) 一九五四年にも木村は、「私は小学生の頃、少年雑誌の懸賞文の賞品に『新日本島』をもらい、あまりのおもしろさに、夢中で夜を徹してよみました。私が生涯において徹夜したのはこの時が初めてです」と述べている。本稿で論じてきた、公的・社会的な共同体の創出するパフォーマンズとしての「思い出」話は、根拠となっていた「大東亜」の崩壊以後にも手放されていない。
- (37) 木村毅「私の学位論文」（『日本古書通信』第二二二号、一九九六年二月十五日）
- (38) 前掲(11)に同じ。